



令和6年1月

スクールカウンセラー 中野隆治



「元日の朝」



みなさん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、みなさんは、新しい年の元日をどんな気分で過ごしたでしょうか。家族とともに帰省したり、近所の神社に初詣をしたり友人達とメールを交換し合ったり、普段とは違う特別な気分になったのではないのでしょうか。

ここに、明治時代、天才と称され、『一握の砂』や『悲しき玩具』などの歌集を残し、惜しまれながら若くして世を去った歌人石川啄木の正月元日を歌った歌を紹介したいと思います。大家族を養い、生活的にも苦しみ、作品を世に受け入れられず、不遇のうちに亡くなった歌人は、感傷的に過ぎる歌が多いですが、珍しく、のどかな正月を迎える心境を歌っています。

何となく、

今年はいい事あるごとし

元日の朝、晴れて雲なし

晴れて風も吹くことのない元日の朝を、今年はいい事があるようだ并希望に満ちたフレーズで表現しているのです。一年の計は元旦にありとは言われていても、昨日までの自分の決して良くなかった状況に別れを告げるように、彼は、こんな歌も歌っています。

年明けにゆるめる心！

うっとり

来し方をすべて忘れるごとし

来し方(=過去)を全て忘れてしまったように、元日は自分の心をゆったりとさせてくれると言っているのです。

みなさんはどうでしょうか。新しい年を迎えて、新しい世界にまさに飛び込もうとする人もいます。昨年までの自分と訣別し、新しい自分になるために決意を新たにする人もいるに違いありません。何れにしても、正月は、正月の朝は、みなさんのそんな意気込みにふさわしいものではないかと思えます。正月の朝に、自分の心の中で誓ったことを、実現させるために、今年という年を、有意義な一年にしてほしいと思えます。啄木は、別の詩の中で、こんな言葉を残しています。

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

みなさんの今年の健闘を祈っています。